

市のこんな人あんな人輝く人を紹介します

人物語り

ひとものがたり

今なお、高校野球に魅せられ続ける人物がいる。市内成東に在住の長谷川實さんは、高校野球に関わってきた自らの半生を、しみじみと語ってくださいました。

それはちょうど50年前に始まった。長谷川さんは成東東中学校の生徒だったころ、中学校に来られた先輩高校生のやる野球に出会った。その時、石のように固くて重い、しかも皮で造られている球に触れ、かつその球の醸し出す「ピシッ、コーン、ドスン、ドスン」という音に衝撃を受け、身振いした。そして、「高校野球はこんなすごい球でやるのか!」と感動し、それ以来ずっと、高校野球に憧れることになった、ということでした。

迷わず地元の成東高校に進学。高校での野球部生活は、それは厳しく、憧れだけでは潰されそうになつた時もあったが、恩師をはじめ、友人等多くの人間関係に支えられ、最後までやり通すことができたとい

高校野球の魅力

また熱い夏がやってきた

はせがわ 長谷川 実さん

昭和39年夏、ピッチャーとして臨んだ千葉県大会、勝運よろしく県代表となり東関東大会まで駒を進めたものの決勝戦で惜しくも敗れ、



投手として活躍する高校3年夏

甲子園出場は夢に終わってしまった。しかし、大会直後、予想もなかった千葉県選抜チームの一員に選ばれ、戦後まだ正式国交のなかった韓国へ日韓親善使節団として派遣されたのである。この出来事は「甲子園」に代わると褒美のようなものであったが、改めて「やり通すことの大切さ」を知った、と話されています。



千葉県大会で監督として采配を振る(昭和53年夏)

更に大学を卒業するや教諭として地元の母校成東高校に着任。教員の道を歩みつつ、今度は監督という指導者の立場から「甲子園を勝ち取る」夢を追い続けたのである。夢の実現のために、部員・生徒に対し、グラウンドではもちろん、日常生活においても自己に厳しくあることを求めた。つまり、勉強するのは当たり前、その上で技術的・体力的な進歩、強化を図ることと共に集中力、気配り、思いやり、そして闘争



PROFILE

1946年山武市(旧成東町)生れ。1962年千葉県立成東高等学校に進学、1970年中央大学法学部を卒業。2003年千葉県立成東高等学校長を経て、2007年千葉学芸高等学校副校長に就任し現在に至る。

心等の養成も必要であり、野球部員だろう!礼儀正しく、さわやかな部員生徒たれ!と接し続けた。夢の実現のための努力はそのまま人間形成に他ならなかった、と振り返っておられました。

その後、校長になられた長谷川さんは最後、正に野球人生の有終の美を飾られました。それは校長として成東高校に戻り母校の発展に力を尽くされた一方で、野球部後輩達へも温かい声援を送り続けることができたのです。同時に千葉県高校野球連盟の会長職にも就かれ、最後まで大好きな野球に関与できたこと、そして千葉マリンスタジアムでの、あの大観衆と県下180有余校の大選手団を前にして、大会の開会を宣するその雄姿を知る人も多いことと思います。文字通り、様々な立場から高校野球を見続けてきた長谷川さんの目と心は、益々熱く燃えているようでした。